

# 越後の冬

小川未明

青空文庫



小舎こやは山の上にあつた。幾年か雨風に打たれたので、壁板したみには穴が明き、窓は壞れて、赤い壁の地膚あちが露あらわれて、家根やねは灰色に板が朽ちて 処ところどころ々むしろに葎かぶを掩かぶせて、その上に石が載せられてあつた。この山の上は風が強い。雪解ゆきげの頃になれば南の風が当るし、冬は沖から吹く風が時々小舎を持って行くように揺ゆするのであつた。だから家の周囲まわりには四方から杉や、松や、榛はんの材で支えをして置く。その木すらもはや大分根元が腐つて、少しの風でぐらつくのだ。

田はたけや圃とりの収いれ穫れは済んだ。太吉の父親は病身の妻とその子を残して、上州へ出稼でかせぎに出たのである。来年、この北国ほっこくの山や野

が若々しい緑で被おほわれて、早咲の山桜の花が散つて、遠野に白い烟けむりが棚たなび曳ひて、桃の花が咲く時分にならなければ帰つて来ない。

太吉は炉ろ辺ばたに坐つて、青竹を切つて笛を造りながら、杉の葉や

枯れた小枝を手折たおつてはこれに火を焚たき付けて、湯を沸して町から母

の帰るのを待つていた。長い月日の間、火を焚く烟で黒すすく煤すすけた

天井の梁はりからは、煤が下つている。其処そこから吊された一ひと筋すじの鉄か

棒なぼうには大きな黒い鉄てつ瓶びんが懸かつていた。ぱつと移りの易いい杉葉

に火が付いて、紅い炎は梁の煤にまで届こうとして、同時に太吉

の顔を赤く色彩いろどつた。太吉は髪かみの縮れた、眼の大きな児こであつた。

燃え上つた火に薪たきぎを入れて、火のこれに燃え付くのを見守つてい

る。紅い炎の舌は、この黒い鉄瓶てつびんを嘗なめるように周囲にちらちら

と纏まつわつて、つるつると細い鉄棒を辿つて、天井の梁にまで走ろうとしたけれど忽たちまち思い止とまったように穏やかに燃え取つた。

太吉は全く火の燃え付いたのを見て、又かたわら傍の竹を取り上げて小刀で孔あなを明け初はじめた。白い細な粉がばらばらと破れた膝の上に落ちる。暫しばらく太吉は熱心に氣を笛の方に取られていたが、ふと手をやめて窓から外の空そらあ合を眺めた。ただ白く雲自身が凍つているように、睨じっとして空は鈍く、物憂ものうく、日の光りすらなかった。彼方あちらの方は一面に暗くなつて見える。暗くなつている空に浮き出ているように溪たにを隔てた松林の山は黒く見えて、僅わずかに見覚えがあるため、それが近くもの山であるということが分るが、若し、全く見覚えがなかったなら、あの山は十里も彼方にあると言われた

とて、それを信ぜずにはいられないような、遠い気持がする。太吉の眺めていた眼は自おのずから塞ふさがった。言い知れぬ悲しさが胸に湧いたからである。

「もうお母かあは帰らしやる時分だ。どの辺へ来さつしやつたろう。」と、独りで言いながら、考えて頭を傾かしげていたが、また何と思いつ返したか、笛を取上げた。

笛を見ると、彼はまた楽しみふもとの心を禁ぜずにはいられない。この笛を吹くのだ。麓ふもとの村へ持もつて行つてこの笛を吹くのだ。雪が降つて外へ遊びに出られなくても、この笛があれば、吹いて楽しく家で遊んでいられる。来年の春になって、小鳥が来る時分までもこの笛を大事にして取つて置く。

「何時頃お父さまは帰って来さつしやるだろう。その時分までもこの笛を大事にして取つて置いて帰らしたら見せるのだ。」

こう考えると、無限にこの笛が懐かしい、恋しい、何うしたらいいだろうかと笛を取上げて彼は雀躍こおどりをした。而して割らないようにと念に念を入れて、只ただ一つまだ開けない孔を穿ほり始めた。

「この孔が開いた時分にお母は帰つて来やしやるだろう。」  
と云つて、口を歪ゆがめて、眼を円く飛び出して、小刀に力を入れた。

雪の多い上越後の片田舎では、冬になれば外の楽しみは全く絶えてしまう。猟に出かけるものはこれを商売にする猟師か、若しくは金持の道楽息子の他にない。一般の百姓は若い者も、年とし老たものも、総すべて終日囲炉裏いろりに火を焚いて取巻くつまき寛くつろぎ、声の好いも

のは声自慢に松前まつまえや、または郷土固有の甚句じんくや、磯節いそぶしなどを歌つて、其処そこに來合せたものに聞きせる。皆みななはつくねんとしてこれを聞きいている。家の外には雪がちらちらと降つて、前の小川の水は独ひとりり寂寞せきぱくを破やぶつて囁ささやいて流ながれている他、村の端はすれに廻まわつていみずぐるまる水車みずぐるまの音が静しずかな林はやしや、田の中を通とおつて其処そこまで聞きえて來る。けれど家の中うちにいるものものの耳みみには、この小川せうがわの囁ささきも水車みずぐるまの音ねも聞きえない。ただ、歌い手の歌うたの聲こゑに聞きき惚ほれているばかりだ。或者あるはは懷ふとこころ手ての儘まま聞きいている。或者あるはは頬ほお被かむりをした儘まま聞きいている。或者あるはは火かに手てを翳かざしたままま、燻くすぶる煙けむりに眼めを瞬しばたいでいる。さもなくば酒さけを温ぬめながらこれこれに合あ槌いづちを打うつて陽氣やうきにするばかりだ。實じつに北国きたくにの冬ふゆは、笛ふエを吹ふくか、歌うたを歌うるか、酒さけを飲のんで女おんな



悪戯か、而して其等の遊び方が原始的で、其処に言い知れぬ哀れがある。是等の笛の音も、歌の声も、寒い、澄み渡った空気に透通つて、一層木精に冴える思いがした。

ヒューと梢に当る風の音がして、ガタガタと窓から吹き込んで障子に当つた。遽に天氣が狂つたのである。太吉は外を眺めて崖端けつぱたに立っている一本の榛はんの木の頂いただきに目を止めていた。

秋の頃、黄色い粉を吐いた花の乾固ひかたまつた死骸や、小さく黒く見える実や、それも僅かに彼方の枝に二つ、此方の枝こちらに一つある位で他に一片ひとひらの葉の影も止めていなかつた。哀れな裸姿になつて木は悄然しよんぼりと立っている。枝は四方に咲いていて、この細い枝にも、冷ひややかな、切ひややかるような、風が当るかと思つたと痛々しい。その

細い梢の頂を見詰めていると、急に太吉は母が恋しくなつた。

鉄瓶の湯は煮え沸ぎ<sup>た</sup>つて、火は何時しか消えてしまった。太吉は笛と小刀とを下に置いて家の外に出て見た。

一度降つた雪は、まだ<sup>ところどころ</sup>処々消えずに山や、田や、圃に残つ

ていた。麓の村も見えた。村の端にある水車場の家根も見えた。

その水車場の傍を通る往還も見えた。けれど一人の影すら見えなかつた。隣村でこの頃新築した小学校が白く林の間から見える。

町へ行く時通る長い野中の松並木が微妙になつて見える。

北の海の方を見ると、ただ白く波<sup>なみがしら</sup>頭<sup>が</sup>が躍っていた。空は暗

く、悪魔が住むように思われた。林の頂に遮<sup>やえぎ</sup>られ、山の鼻に隠れてその暗い空も、鉛色をした海も一部しか見えない。前には脈々

たる頸城くびきの山嶺さんれいが迫つて、その高い山を越えれば他国である。何の山にも雪が来て頭が真白になっていた。雲が降りて山々の腰から上は墨を塗つたようだ。

太吉はまた暗い沖の方を見た。

「お母は何うさっしやつたろう。……いんまに降つて来るだに……」

太吉の母は病身であつた。いつも青い顔をして咳ばかりしてゐた。けれど太吉を可愛がつた父親てておやが旅たび稼かせぎに出てから、一ひとし入お太吉も母を慕つた。母は二三日前まで床に臥ついていたが、この日は朝のうちには天氣がよかつたので、買物をするため、豆を少し許負ばかりよつて町へ行つた。町へ行く時、

「太吉や、気分もいいし、お天気も好きそうだから町へ行つて来るぞ。昼ひるすぎ過には直じきに帰つてくるから待まつていれよ。」

と言いい遺いして、平常商ふだんあきない売いに出る時の風で、草鞋わらじを穿はいて出て行つた。この村から、高田へは三里、直江津へは二里ある。母は常に高田へも行いき、直江津へも行いつた。太吉は、母に向むかつて何方どっちの町へ行いくのかと聞きこうかと思おもつたが、母が直じに帰かえつて来るといつたので、別に聞きかなくともいいと思おもい返かえした。而してただ、「そんだら、早く行いつて来こやしやれ。雪が降ふつて来ると不可いけないすかい、早く行いつて来こやしやれ。」

といいつたばかりで、出いて行いく母を淋さしそうに見送みおくつていた。太吉は今年十四であつた。山にはただこの家や一軒あるばかりだ。麓ふもとの

村に下りる迄は二三丁程あつた。太吉は日に幾回となく、この赤あ地かの山道を下りて遊びにも行き、家の用事をも達たしに行つた。

その道は無論細い坂になつていて、杉の林を一つ通らなければならなかつた。天氣の好い時は何でもないが、風が吹いて、雨が降る時はこの下を通ると雫しずくが滴れる、杉の枝がざわざわと動いて、襟えりもと元の寒いのが感じた。又雪が降ると杉の枝が撓たわんで、頭にかかるのが厭な感じであつた。

家の前に立っていて、水車場の傍わきの往還に人の通りがあるかと眺め——若しや自分の母が、今にもあの道の上に出て来はせぬかと見ていたが、何時迄待たいてもそれらしい姿が見えなかつた。

「お母、早く帰つて来てくれやしやればいいに……。」

と太吉は独り呟いた。而して眼前に悲しい影がかかったように、自と氣持が滅入るのを感じた。尚も太吉は立つて水車場の方を見ていると、裏の山から飛んで来た鳶とびが頭の上を過すぎたが、軽く、急せわしげに翼を刻きざんで、低く溪たにに舞い下つて水車場近くの枯木に止つた。止つたかと思うと、又急しげに翼を刻んで、再び高く舞い上つて、向うの松林のある山を越えて遠く、海の方へと飛んで行つた。太吉はその鳶とびの行衛ゆくえを見守つていた。

この時寒い風が吹いて来た。

振り向いて、裏の山を見ると、山は夕暮の空に接せつ吻ぶんしていた。山と空の境界に松だか、杉だか聳そびえていた——二本——三本ばかり——その樹の頂あたまが、北の寒い風に動いていた。

「ああ、もう晩方ばんがたになった。まだお母は帰って来やしやらん……」

太吉は坂を下つて、杉林の処まで来た。けれど母の姿は、まだ見えなかつた。暮れるに早い山の林——その下蔭が暗くなつた。  
 やまから 山雀しじゆうやら、四十雀しじゆうやら、その他の小鳥が、チエンチエンツーツーと林の暗い、繁みで小啼ささなきをしていた。

「お母！」と呼んで見た。

けれど、その声は空しく木精こだまに響いたばかりだ。魂消たまげたものか  
 パタパタと鳥の羽叩はばたきしたのが聞えた。

耳を澄すますと、水車の音が此処ここまで聞えて来る。ただ悲しいと思つてその音に耳を澄すましていると、

「お母——病気で——死にそうになって——道でたお臥れていやしや——る。」

と歌っているような。その歌っているのが、誰かが歌っているような。その誰かが自分であつて、自分の心が歌っているような。——太吉は、母が病気で道で臥れているのでないかと思つた。

そう思うと胸の裡うちが騒ぎ出した。もう一刻もこうやっていられなくなつた。彼は仕度をしようとして走つて家へ歸つた。家へ入ると急に中が真ま暗くらになつたようで、窓から明りが差し込んでいゝばかり。それも悲しい晩方の空の色に、何となく一家の不ふ幸あわせを語っているようだ。囲炉裏の火は全く消えて、鉄瓶の湯も水に返



つたらしい。僅かに差し込む窓の明りが、其処に投げ出されていた笛と小刀とを照らして、小刀の刃が白く光って見えた。

太吉は笛を見ると、急に昼前、まだあの笛の孔を明けぬ前は母がいたのだと思つた。母が今帰ってくれば、この笛は昔の孔の明かぬ前になつたからとて惜しくない。斯こんな様笛はいらぬから、どうか母が帰ってくればいいにと地踏じだんだ踏んだ。

太吉は小さな草鞋を穿いた。菅笠すげがさを取つて戸を閉めると一目散に駆け出した。

「町へお母を迎いに行つて来る——。」  
こう独り言をいうと、急に胸が塞ふさがつて、熱い涙がぱらぱらと湧いた。太吉は心のうちでこう叫んだ。

「お母に遇あつたら、ウンと恨んでやろう！ お母に遇つたらウンと泣いて小言こごとをいってやろう！」

夢中になつて一目散に峠を走つて、村に下りると、急に他の人の顔が目めに付いた。

けれど胸が張り切つて、知つた人に遇つても物を言うのが厭であつた。

成丈なるたけ人の顔を見ないようにと走つて、いつしか水車場の脇も通り越した時分、

高田へ行かしたか？ 直江津へ行かしたか？……と惑つた。

太吉の歩みは遅くなつた。

「直江津へ行かしたんだろう？ どれ、聞いて見よう……。」

村端に一軒の桶屋があつた。よく母が町への出入りではいにこの家へ立寄るのである。いつしかその桶屋の前へ来た。五つ許ばかりの頭に腫はれもの物の出来た子が立っていた。家の前に一本の柳の木があつて、子供の汚よごれもの物を洗つたのが、その柳の木から壁板に繋がれた繩ちぢに掛けてあつた。家は藁屋わらやで、店には割りかけた赤味の板が散ばちぢつていた。けれど別に人の来ている様子はなかつた。

太吉は外で、こう声をかけた。

「今日は！」

「おーい。」 「太吉かー。」

「お母今日寄らしたかい。」

「いんや、寄らしやらんぞ。町へ行かしたけい。」

「まだ帰えらしやらんから迎いに行くだ。」

「まだ帰えらしやらんちゆうだか。」

「何方どちらへ行かしただろうのう。」

「己おらあ知らんが直江津だんべえのう。」

と桶屋の女かみさん房が家の内で答えた。

太吉は直江津へ向った。

厚く重なり合つた雲の断目きれめから、飴色の弱い日が洩れた。畦あぜの

並木の片側が薄く照り映えた。田の中には氷が張つて、処々に雪が消えずに残っている。街道を行くと、旅人の影がちらちら見られた。電信柱は遠くまでつづいた。折々おりおり冬木立に風が当つて、枝が鳴るかと思うと頭の上の電線が呻すなやまった。彼方に沙山が見え

る。急いで来ると、やがて沙山へ着いた。沙山を越えると町だ。

町へ入ったのは日暮方であつた。入日が海辺の町に当つていた。空つ風が強くて、黄色な砂塵すなほこりが揚つていた。雪が来る前には乾くものだ。道は乾き切つて割れている処さえあつた。小高い丘の船問屋の高い竿の尖さきに赤い旗が翻ひらひら々と閃ひらめいている。また町の三階造の宿屋の窓硝子まどガラスがぎらぎらと黄金色に輝いていた。太吉は町の中を彷徨うろうついていた。馬が荷車を引いて通つた。人力が駆けて行つた。何れも日暮方であるのと、夜になると風が寒さむいのに怖れて、行先を急いでいる。その他、忙せわしそうに道を歩いている男や女の姿を見た。けれど自分の母の姿は見えなかつた。

太吉は、心当りの家を尋ね廻つたが、何等の手掛りを得なかつ

た。彼は疲れた足を引摺って町を出ると、浜辺の広々とした処に  
来た。この辺は一面に無縁の難船者の墓がある所であつた。何  
処すこの者とも分らない航海者や、船乗人が、暴風で船を壊されて、  
海の藻屑もくずとなつて、この浜辺に打ち上げられたものを、この海岸  
の漁獵人すなどりにんが此処ここに葬つたのである。昔からの墓が此処にあるの  
だ。いずれも三尺に満たぬ木標もくひょうが建られていた。古いのは腐  
つてしまい、二三年前のものは、墨痕すみあとが雨風に消えて、根元が  
腐りかけて傾かしがつている。まだ新しいものは字も鮮かに読まれて、  
「遭難者の墓」と、別に名の分ろう筈はずがなければ、ただこう書い  
てあつた。他に、卒塔婆そとうばや青笹などが処々に建てられていて、そ  
の赤く枯れた笹に当時結び付けられた白紙や、赤い紙などが淋し

げに風に動いていた。太吉はその墓場で休んだ。

白い徳利とくりの欠けかや、石地藏の頭なども落ちてゐる。暫らく、石の上に腰を下していた。此処からよく海が見える。海は真黒だ。空は暗い。空の暗いのよりも海の色が黒い。彼は偶然ふとこの黒い海の中に怖ろしい鰐わにや、鱻ふかさめ鮫が棲んでゐるのだと思つた。

「お母——どうさしたろう。」

こう力なく言つて、太吉はまたあて当もなくとぼとぼと歩き出した。直江津と高田との間は二里余りある。直江津は北に、高田は南になつてゐる。

日が全く暮れてしまつた。太吉は疲れた足を引摺りながら、とぼとぼと昔の今町街道（直江津から高田へ行く道）を歩いて来た。

北風が強いので、雲が払い去られて星が出た。空は海のように青かつた。星の光りは凍るように冴えた。宛然さながら金銀、水晶、瑪瑙めのうを砕くだいたようであつた。太吉は踏切番の小舎こやの前まで来ると、この汽車道に添ついて行けば早く高田へ着くと考えた。小舎は野中であつた。四辺あたりの林や、森は静かに眠つていた。小舎の障子には明るく火影ほかげが照つて、中で二三人酒を飲んで笑つている様子であつた。太吉は番人の見ていないのを幸いに抜ぬき足あしして線路内に立入ると一生懸命に線路に付いて駆け出した。一ひとしきり陣夜嵐が空を渡つた。星は身み慄ふるした。

轟々ごうごうと闇の裡に鳴つて溪河が流れている。其処には、黒い鉄橋かかが架かつている。太吉は氷のように冷たな鉄橋かかに縫すがりながら細い



板の上を怖る怖る渡った。下は暗く、深く深く、岩に砕けて水が叫んでいた。霜は一面に白く、粉の如く板の上に結んでいた。星明りに白くなって光った。やっとその難関を通り抜けた。遠くの方で犬の遠吠するのが聞える。

また一陣夜嵐が空を渡った。

太吉は覚え<sup>みぐる</sup>ず身戦いすると、北の方から黒雲が自分の後を追つて来た。<sup>またた</sup>瞬く間に拭<sup>ぬ</sup>ぐつたように星<sup>ほし</sup>晴<sup>ばれ</sup>のしていた空は曇つて、星の光りが遠く遠く幽<sup>かす</sup>んだ。

また一陣夜嵐が空を渡った。さらさらと顔に当たったものがある。<sup>なで</sup>撫て見ると雪であつた。あ、雪が降つて来た！ といつて太吉は途<sup>みち</sup>を急いだ。この辺には人家がなかつた。全くの広い野原の中で、

目を遮る大きな林もなかつた。雪は次第に降つて来た。

今迄頼りに歩いて来たふたすじ二三条の線路は見えなくなつた。枕木も

隠れてしまつた。太吉の笠や着物は重くなるまで雪が積つた。益ますすます

々夜嵐は吹き募つて、雪は目となく耳となく、襟元となく入り込んだ。指頭ゆびさきも、足尖つまさきも、感じがなくなつた。何処も一樣に

真白になつて、もう一歩ひとあしも踏み出すことが出来ぬまでに四辺が分らなくなつた。

「お母！」と太吉は泣声を上げた。

その声は余りに小さかつた。弱かつた。彼方の畦あぜに悄しよんぼり然と

立つてる並木にすら、聞えなかつたであらう。漸々だんだん黒雲は頭の

上を通り越した。薄明るかつた南の方の空が、暗くなつた。黒雲

が空を掩い尽したのである。ただ闇の裡に風が暴れた。雪がさらさらと鳴った。耳に鳴る雪は刻々に地に積る気はいがした。

眠じっと立たっていると手足がしびれて来てだんだん気が遠くなつた。

遂に何処どこに何なにしているのやら分らなくなつた。——種いろん々なものが

見えた。種々な音が聞え始めた。昼前に造こさつた笛が、あの儘転が

つている、水車が歌をうたっている——その歌は水車でなくて、

自分が歌っているようににも思われる。桶屋の前に子供が遊んでい

た。あの黒い海に鰐が住んでいる。白い徳利の欠が落ちてゐる。

笹に白い紙、赤い紙がひらひらと動いている——。

ビューウ、ビューウ……風の音！ つづいて凄すさまじい車とどろの轟とどろきが

した！

ほのぼのと夜が明け離れてから四時間ばかり経た。烏は畦の並木に止まって悲しそうな声で鳴いている。ちようど雪の晴間であつた。四辺はどんよりと曇つて、今にでもまた降つて来そうな空模様である。

線路の上に五六人、集つて何やら見ていた。見ているのではない。取片とりかたづけ附つけていた。雪が血に染つて子供の死体は滅茶苦茶であつた。集つどつているうちに一人、頭から黒い布きれを被つて、顔色ろうが蠟ろうのように青白い、窶やつれた女がある。眼は泣き腫らして、唇の皮が厚く乾ひからびて、堅く死骸に抱き付いたまま身動きすらしなかつた。それは太吉の母であつた。





# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑  
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集」小説集※「#ローマ  
数字1、1-13-21」講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「新小説」

1910（明治43）年1月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年11月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 越後の冬

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>